



国際ナショナルGSトロフィー イギリス代表チームに栄冠

南アフリカを駆け抜ける 過酷な7日間

2010年国際ナショナルGSトロフィーは、7日間にも及ぶ激戦の末、3つどもえの接戦をわずか1点差で制したのは、イギリス代表チームとなった。

今年のオフロードアドベンチャーは、南アフリカ3カ国(南アフリカ、スワジランド、モザンビーク)2000kmを駆け抜ける壮大なスケールとなった。アメリカが優勝した2008年のチュニジア大会に比べ、今年は参加チームも2倍に増え、南アフリカの暑さと土埃の中で熱戦が繰り広げられた。

10チームが参加した過酷なレースは、ライダーを極限まで追い込んだ。数々のチャレンジにより、ライディングスキルはもちろんのこと、持久力やチームワークなども試される。ノンストップのスケジュールは、険しいヒルクライム、障害物コース、スロースピードレース、川渡りやトラクター引きなどの数々のチャレンジを含む長い一日(砂利道を一日300kmも!!)が7日間も続く。もちろん豪華なホテルや道楽なんてものはない。夜はアフリカの星空の下でキャンプだ。

イギリスチームは楽しみながら数々のチャレンジに立ち向かい、2位の南アフリカチームにわずか1点で競り勝ち勝利をおさめた。健闘した北欧連合チームは3位となった。

GSトロフィー2010最終結果

1位	イギリス	152
2位	南アフリカ	151
3位	北欧連合	149
4位	カナダ	124
5位	アメリカ	107
6位	アルプス	105
7位	スペイン	101
8位	ドイツ	95
9位	イタリア	86
10位	日本	54



GSトロフィーの舞台裏は?

今年も大成功のうちに幕を閉じた国際ナショナルGSトロフィー。世界中から集まった10チームが、トロフィーをその手にするために勇敢に戦い、驚くべきチームワークと国境を越えたGSライダー同士の結束力を見せてくれた。GSトロフィー2010プロジェクトマネージャーであるMichael Trammer氏にGSトロフィーの舞台裏について聞いてみた。

Q. 何名くらいのスタッフが関わっていますか?

40名の参加者に、53名のスタッフが同行しました。サポートカー14台、バイク65台です。多すぎるように感じるかもしれませんが、それほどのビッグイベントなのです。みんな素晴らしい働きをしてくれました。

Q. メディア関係者はいましたか?

各チームにジャーナリストが1名ずつ同行していましたが、彼らはゲームには参加しません。メンバーが怪我をした時だけ、ジャーナリストがチームに加わるというルールがあり、実際に日本チームがそうになりました。その他、何名かの映像チームとカメラマンによって撮影を行いました。

Q. 地元の人々の反応はどうでしたか?

2,000kmにも及ぶルートで、我々は沢山の地元の人々に会い、異文化体験をしました。地元の人たちとも積極的に交流を持ったので、今あのルートをたどれば、GSトロフィーのTシャツやキャップを身につけている人をよく見かけられるはずですよ。

Q. バイクにトラブル等はありませんでしたか?

特にありませんでした。万全の体制で望みましたが、バイクも見事なパフォーマンスでした。ツラテックのメカニックの“徹夜の作業”もなかったし、メツラーのカルータイヤも余裕で耐えられました。

Q. 各チームはお互いに助け合っていましたか?

常に2チームが一緒にいて、毎日その組み合わせが変わります。我々の思惑通り、参加者たちは、サンドライディングのテクニックを教え合ったり、泥からバイクを引き上げるのを手伝ったり、いかなる状況においてもお互いに助け合っていました。それがBMW Motorrad 国際ナショナルGSトロフィーの全てだと思います。このイベントが、そのようなチームワークや仲間意識、友情を育むことは大変うれしい事だし、誇りに思います。

イギリスチームのインタビュー

Kevin Hammond (50歳)
「すごく大変だった。我々のスキルが試され、限界に達したよ。大変な思いもしたし、何度かクラッシュもしたけど、もう一度やれと言われたら喜んでやるだろうね。砂漠を突っ切ってインド洋に出た時の、青い海を見ながらの冷たいビールは忘れられないよ」

Mark Kinnard (42歳)
「明日が最終日という時、とても厳しい状況だった。その夜にこう言ったんだ“結果がどうであれ、俺たちは満足だ。もちろん勝ちたいが、この国、友情、楽しさも苦しさも分かち合ったこの経験こそが、勝利の喜びよりも一生に残る物だ”って」

Alastair Allan (42歳)
「やり遂げた!それしか言えないね。素晴らしいアドベンチャーだった。全員があっという間に打ち解けたし、だからこそ素晴らしいイベントになったと思う。チームワークのよさも成功の鍵だった。信じられないような試練だったが、本当の一生に一度の経験だった。」